

2026 年 9 月 16 日

研究休暇報告書

南山大学長 殿

所 属 人文学部キリスト教学科

職氏名 教授 三好千春

受入研究機関等：自宅および研究室。フランス・大韓民国での史料調査

期間：2025 年 9 月 16 日～2026 年 9 月 15 日（1 年間）

目的： 科学研究助成事業（科研費）基盤研究（C）「日本カトリック教会と日中戦争一教会指導者たちを中心に－」のための海外史料調査・研究、およびこのテーマに連動する植民地時代の日韓カトリック教会関係の調査・研究を進展させるため。

この研究休暇期間中、まず、科研費の課題である、日本カトリック教会が抱いていた「防共」意識および教会指導者たちの日中戦争観に関する研究を更に進展させるために、既に昨年度にローマにある L'Archivio Storico de Propaganda Fide（プロパガンダ・フィデ歴史文書館）で史料調査をして入手していた 1937～38 年の駐日教皇使節パウロ・マレラ関係史料の解読と分析を進め、その一端についてキリスト教史学会で研究発表を行った。この発表内容は、2026 年 8 月に刊行された『キリスト教史学』第 80 集に「史料紹介」の形態で掲載された。このマレラ関連史料に関しては、2026 年度中に新たな研究発表を行う予定である。

それと並行して、2026 年 2 月～3 月に再度、L'Archivio Storico de Propaganda Fide にて、前年度に調査しきれなかった、日中戦争時に「カトリック皇軍慰問使」として北支（中国北部）および上海に派遣された田口芳五郎神父（1941 年に大阪司教、のちに大司教・枢機卿）に関する史料を中心に日中戦争関連の史料調査を行った。

次に、植民地時代の日韓カトリック教会史関係に関する研究のために、1930 年代後半から 1945 年までの朝鮮半島における日本人教区長が存在した 2 つの教区、すなわち、大邱教区と光州教区に関する史料調査も L'Archivio Storico de Propaganda Fide で行った。

また、植民地期における朝鮮半島での日本人信者の動向、および大邱・光州教区の日本人教区長に関して、さらに詳しく知るために、2026 年 8 月に 1 か月間、ソウルにある韓国教会史研究所で史料調査および研究を行った。

そして、8 月後半には光州教区に赴き、同教区の教会史研究所の研究員の人々と会い、脇田浅五郎神父に関する研究に関して、今後、相互に協力していく関係性を築けたことは一つ

の成果であった。

時間の制限もあり、韓国教会史研究所では、光州教区の脇田浅五郎教区長に関する史料と関連論文・書籍の調査、および、植民地期にソウル（当時の呼び名は京城）に居住していた数百名の日本人信徒に関する史料調査を中心に行った。これらの研究には、日本側の史料の発掘も必要であり、まだ相応の時間がかかると思われるが、今後、少しずつ成果を研究発表や論文の形で出していきたい。

従来の計画では、フランスでもパリ外国宣教会の文書館にて史料調査を行う予定にしていたが、数年来続けていた名古屋教区 100 年史に関する執筆を 2026 年 7 月中に終わらせる必要があったため、そちらに時間を割かねばならなかった関係でフランスでの調査が出来ず、今後に持ち越さねばならなかったのは残念であった。

なお、自分の研究成果を社会に還元するという意味において、2025 年 12 月に放映された NHK 教育テレビ「こころの時代」徹底討論シリーズ第 11・12 回「宗教は戦争にどう関わってきたのか」（2026 年 8 月にアンコール放送）に出演し、日中戦争とカトリック教会の関係を含め、戦争と日本のカトリック教会に関して、戦前、戦後を含めて議論できたこと、また、2026 年 8 月に NHKFM ラジオ「宗教の時間」において「カトリックとアジア・太平洋戦争」前編・後編に出演して、やはり戦争とカトリック教会について、よりキリスト教信仰の側面からの視点を強調しつつ語ることができたことは、自分の研究にとって大きな意義があった。これらの出演のための準備にそれなりの時間を費やしたが、それは研究休暇中であつたからこそできたことでもあり、また、自らの研究の社会的意味や信仰との関係性などを考える上でも、そしてこれまでの自分の研究のまとめと振り返りのためにも、よい機会となった。

今回の研究休暇は、前半の 2025 年 9 月～2026 年 1 月までは卒論指導の関係で自分の研究に集中できず、また史料調査が中心となったため、その史料を使つての研究成果の発表にまではなかなか至れなかった。しかし、これまで 2 つの科研費を通じて研究してきた 1930 年代の日本のカトリック教会の動向に関しては、3 年以内に著書として上梓すべく、準備を始めている。また、今後、この研究休暇で得た史料に基づきつつ、研究発表や論文執筆を行っていく所存である。

以上